

緊迫する 世界



川上高司
かわかみ・たかし 1955年、熊本県生まれ。拓殖大学海外事情研究所所長。大阪大学博士(国際公共政策)。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、

防衛庁防衛研究所主任研究員、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書に『無極化』時代の日米同盟(ミネルヴァ書房)、『新しい戦争』とは何か(同)など。

史上まれに見る泥仕合の米大統領選

米大統領選は少し前まで、民主党候補のヒラリー・クリントン元国務長官が、共和党候補のドナルド・トランプ氏を余裕を持って引き離していた。激戦州以外のほとんどの州でクリントン氏が優勢で、「米国の女性大統領誕生」は揺るがないとみられていた。ところが、FBI(連邦捜査局)が10月28日、クリントン氏の「私用メール問題」の再捜査着手を表明した。これをきっかけに、トランプ氏が一気にクリントン氏を追い上げ、米紙ワシントン・ポスト紙とABCテレビの世論調査(11月1日発

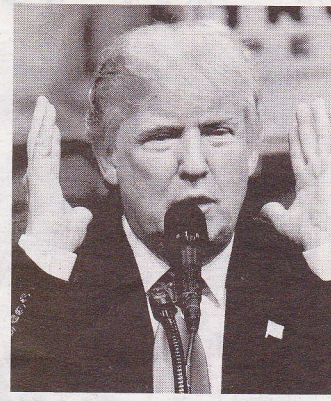
1

表)では1つ逆転した。正直、投票日(米国時間8日)当日まで勝者は分かっていない。今回の米大統領選は、史上まれに見る泥仕合となった。ここまで誹謗(ひばり)あつた。ここまですべて

う)中傷合戦に明け暮れ、スキャンダルが投票直前まで噴出した選挙戦はかつてなかった。クリントン氏とトランプ氏のどちらが勝利しても、米国は著しく傷つ

て、漁夫の利を得るのは「リベジヨニスト国家」(国際秩序を覆すことを試み、国際規範に挑戦する国家)である、中国やロシアである。

どちらが勝っても「分断の危機」



クリントン氏が勝てば、トランプ氏を熱狂的に支持している白人中間層や非エリート層は、クリントン氏に対して猛攻撃を継続するだろう。トランプ氏が勝てば、女性やヒスパニック、それにエリート層が一丸となって

とトランプ氏が醜聞を暴きあって、米国が自ら弱体化するのを見ていられない。ロシアは大統領選に手を突っ込み、トランプ氏に加勢した。クリントン氏の「私用メール問題」は格好の謀略の手段となっている。米国の衰退は世界のパワ

て勝つ)ことを、ロシアのストーリーは「謀略」をもって上策とした。中国からすれば、クリントン氏

米国パワー低下で漁夫の利得る中露

ー・バランスに大きく影響し、世界情勢は緊迫する。世界中の国々が、米大統領選の行方を固唾をのんで見守っている。顕著な例が、フィリピンのドゥテルテ大統領だ。南シナ海における米国のパワーの退潮を見越してか、さつと中国にすり寄り経済援助を引き出した。典型的な「バンドワゴン現象」(強い者に巻かれる)が、韓国に続いてフィリピンで起こっている。ここで肝心なのは、日本である。日本は、南シナ海や東シナ海で頭在化した米中両国のバランス・オブ・パワーの変化にどう対応するのか。日米同盟を強固にする一方で、米国離れをするフィリピンをつなぎ止める「要」として、当該地域の平和と安定を守る役割を担わなくてはならない。